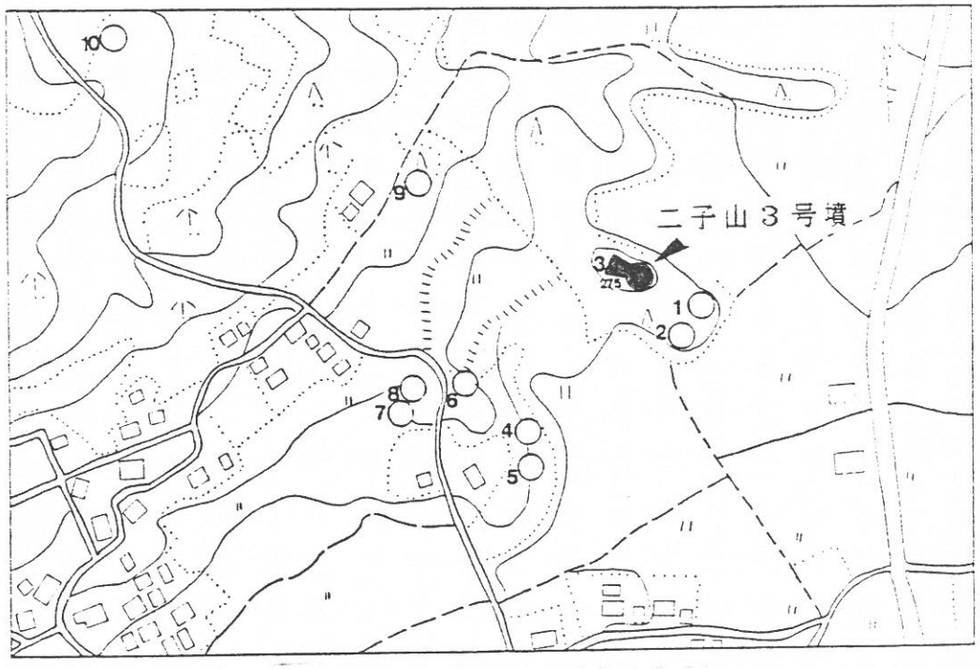
現地説明会資料

1989年9月16日

二子山３号墳発掘調査

遺　跡　名：二子山３号墳
所　在　地：福井県大飯郡高浜町小和田
調査原因：将来の開発行為に対処するための重要遺跡確認調査
調査目的：第１次調査　古墳の墳形・規模・外表施設の調査
　　第２次調査　埋葬施設の調査
調査期間：第１次調査　昭和63年10月19日～12月　3日
　　第２次調査　平成元年　7月20日～　9月20日（予定）
調査面積：第１次調査　９０㎡　　第２次調査　６０㎡
調査主体：高浜町教育委員会
調査担当：若狭歴史民俗資料館



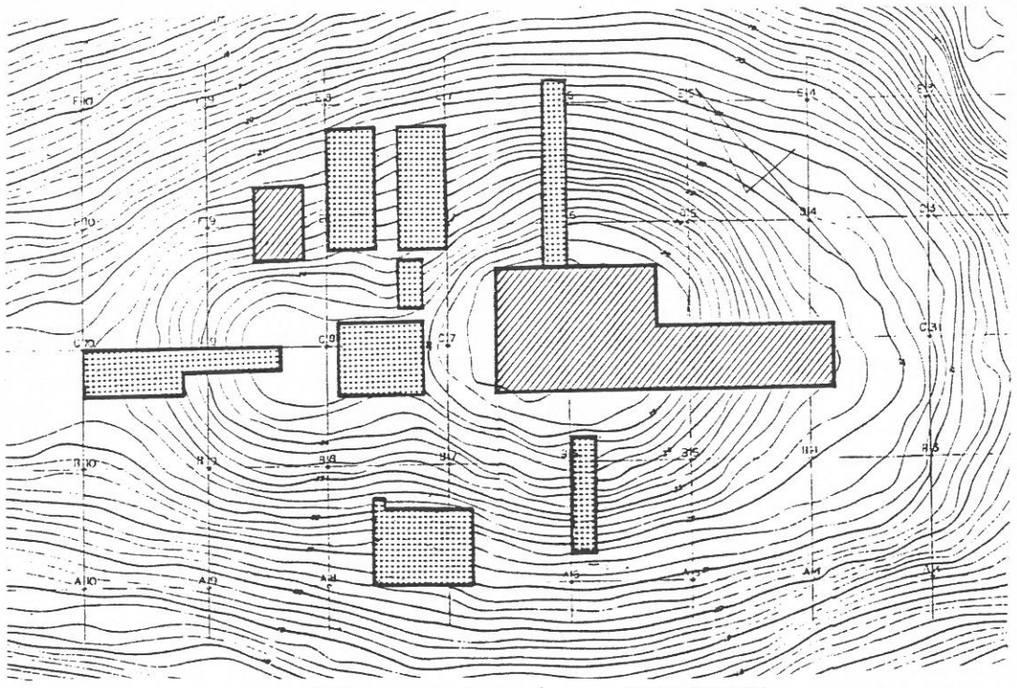
古墳周辺の地形と古墳の位置

Ａ．二子山３号墳の発掘調査

二子山３号墳は青葉山の東麓丘陵より派生した支尾根の先端部にあります。付近には古墳時代後期（６世紀）の円墳が群集して小和田古墳群を形成しています。また、隣接する尾根の先端部にある小和田遺跡からは、弥生時代中期の石剣・石戈が発見されています。長く二子山３号墳は円墳と考えられてきましたが、近年の高浜町誌編纂に関連しての分布調査で前方後円墳であることが判明しました。現在確認されている限り、大飯郡唯一の前方後円墳です。

今回の調査は将来の開発行為に備えるとともに、古墳の保存・活用の方法を模索するために国庫補助をうけて実施しました。

昨年度第１次調査では墳丘の形態や規模、外表施設の有無が明らかになりました。全長26m、後円部径16.3mの前方後円墳で、地山を必要なだけ削り出して概形をつくり、上部に盛土して築造されていました。後円部の後方の発掘区では横穴式石室の羨道部が確認され、くびれ部の斜面からは５世紀末や６世紀後半の土器が出てきました。横穴式石室をもつ古墳としては相当古いものであるという見通しをもちました。なお、前方部の墳頂にはなんらの施設もなく、墳丘の表面を飾る葺石や埴輪もありません。



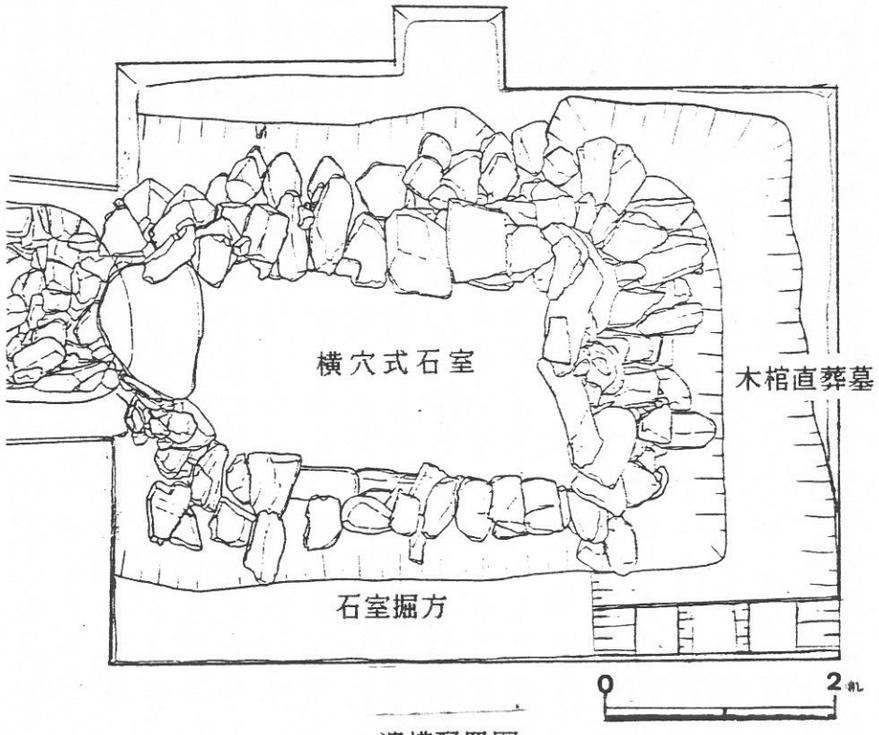
第１次調査区　　第２次調査区

二子山３号墳発掘調査地区

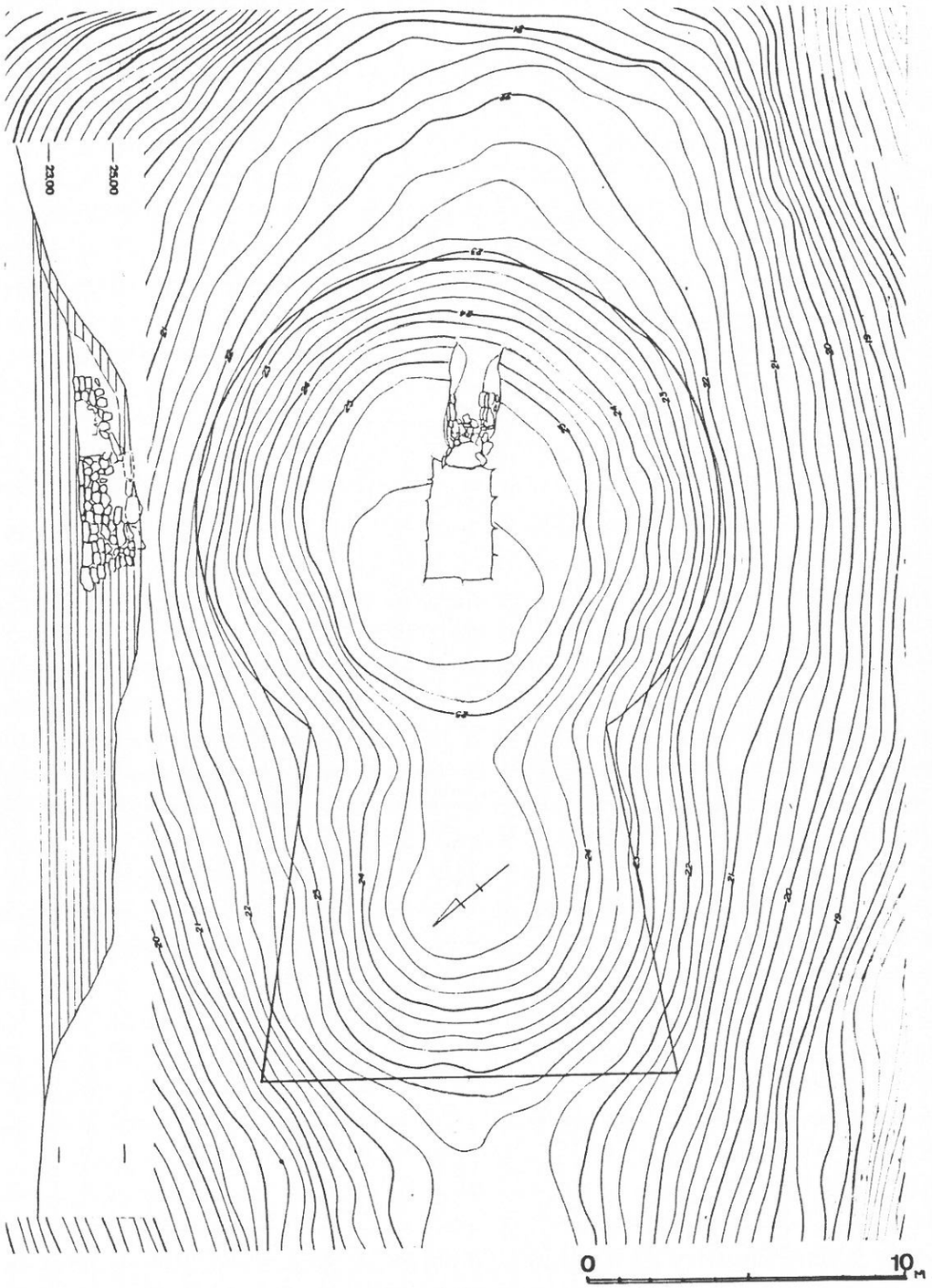
今年度第２次調査は後円部墳頂に発掘区を設定して、埋葬施設である横穴式石室の調査を行いました。石室は河原石積みで、長3.7m・幅2.0m・推定高1.7mの玄室と、長さ4.4m（石積み部分の長さ2.5m）・幅0.8mの羨道とからなり、ほぼ南東方向に開口します。羨道部には天井石を架けません。玄室入口を塞ぐ閉塞石は割石積みでほぼ完存していました。玄室は天井石と側壁石積み上部とが崩壊して室内に倒れ込んでいましたが、奥壁は完全に残っていました。盗掘をうけた形跡はありません。埋葬時に遺体とともに石室内に置かれた副葬品には、多数の土器（須恵器・土師器）、勾玉・管玉などの装身具、馬具、刀や鉄鏃などの武器、鎌・斧・刀子といった鉄製農工具などがあります。これらの出土状況から少なくとも４体の遺体がこの古墳に葬られたものと思われます。

この古墳は副葬された須恵器の年代から６世紀初め頃に築造され、６世紀中頃まで追葬が行われました。なお、墳頂部より出土した須恵器はこれより新しいものを含み、この古墳に対する祭祀は６世紀後半まで続いたようです。

後円部の調査区からは横穴式石室とともに割竹形の木棺を直接埋めたと思われる長方形の墓壙も見つかりました。古墳時代の墓でありますが詳細は不明です。石室構築時に切られていますので、二子山３号墳より古いものです。古墳築造以前にも、この尾根は墓域として利用されていたようです。



遺構配置図



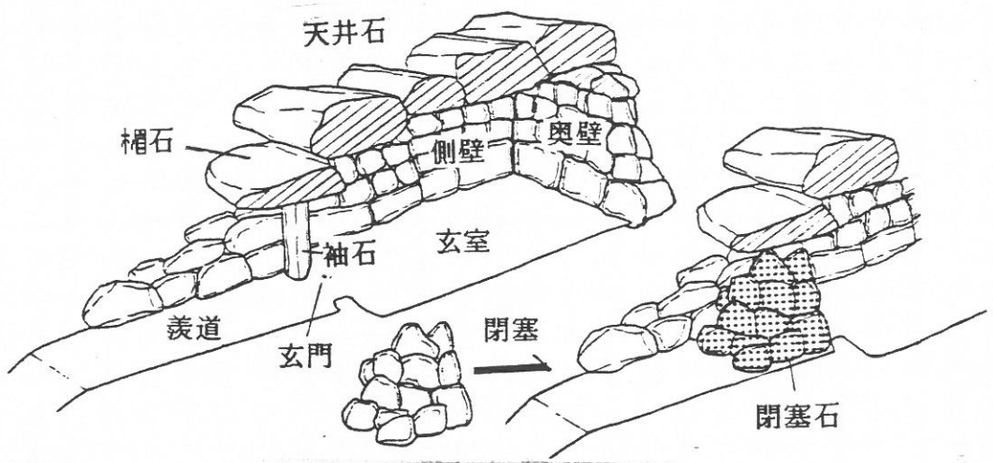
墳形と横穴式石室の位置

B．横穴式石室

本年度の調査によって二子山３号墳の横穴式石室の内容がほぼ明かとなりました。横穴式石室というのは古墳の墳丘内部に遺骸を納めるための石積みの墓室（玄室）とそこに横からはいる通路（羨道）を有する構造の埋葬施設です。これは日本の古墳の出現当初から用いられていたものではありません。その出現以前は竪穴に石室を築いて通路をつけない方式がとられていましたが、横穴式石室は墓室への出入りが容易であるため、６世紀後半以降には家族墓として大いに流行しました。横穴式石室の採用には各地域で時期差があり、４世紀後半に北部九州の玄海灘沿岸に最も初現的な形態が現れ、畿内に導入されるのは６世紀初頭になります。若狭は横穴式石室をいち早く受容した地域で、上中町向山１号墳は５世紀中葉まで遡ります。当古墳は６世紀初めの古墳です。

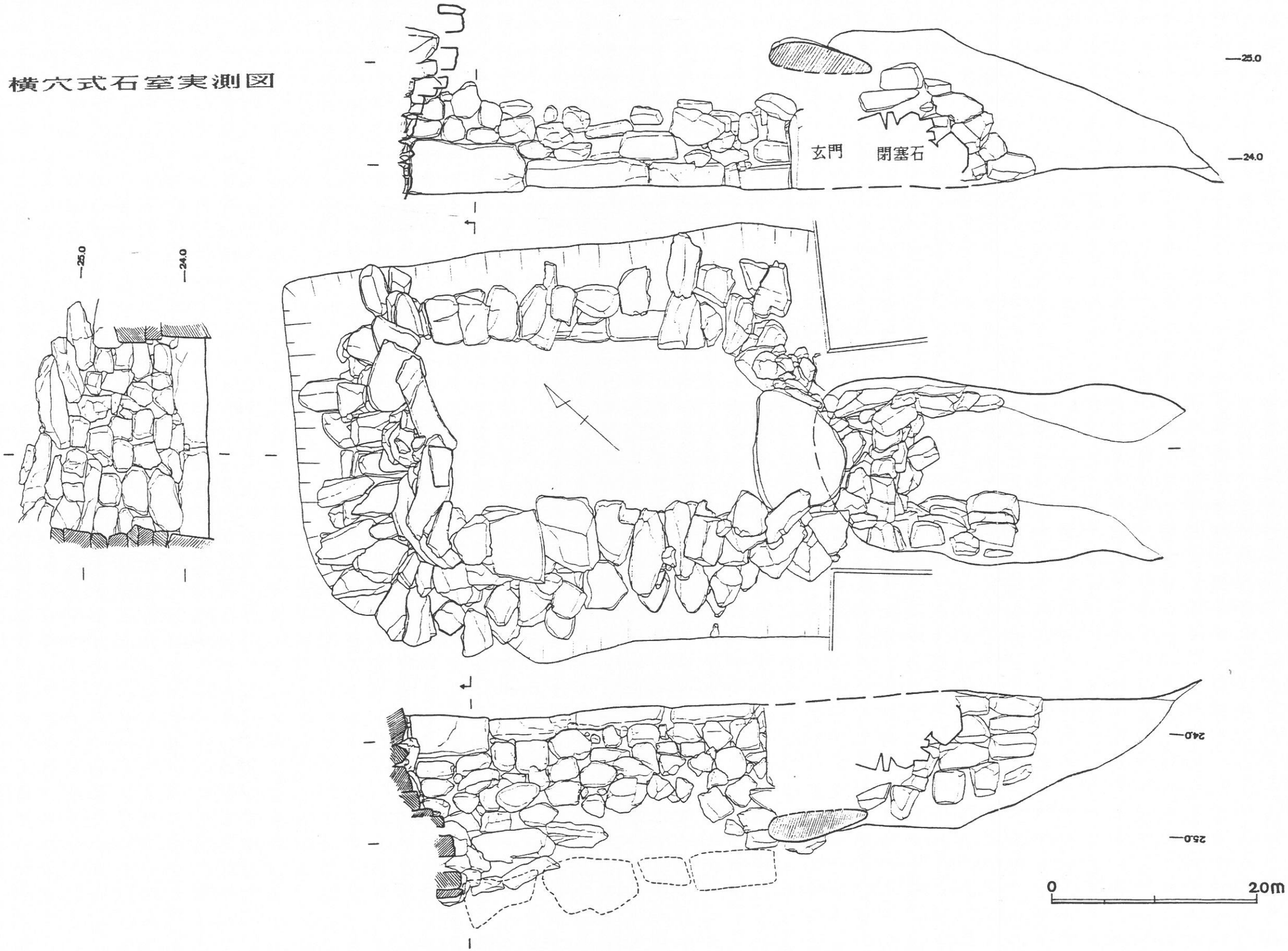
二子山３号墳の横穴式石室は後円部墳丘の中段にあって、南東方向（S41°E）に開口します。石室の構築方法はまず地山を羽子板状に掘り込みます。羽根をつく部分が玄室、取手の部分が羨道です。次いで玄室は壁体石材中もっとも大きな河原石を横にして据え、平面形を確定し、その上に河原石を４段小口積みします。さらに方形板状の石を２段積んで４枚の天井石を架けています。小口積みの部分からはほとんど地山の上にでますので、石積みと並行して盛り土がなされます。最後に玄室全体をきめの細かい土で被覆し、その上に盛土します。床面には玉砂利が敷かれます。玄室の規模は長さ3.7m・奥壁幅2.0m・前壁幅1.8mで、天井の推定高は1.7mです。

羨道は長さ4.4m・幅0.8mで、玄門より2.5mの範囲は石積みで側壁をつくります。天井石は架けず、人頭大の礫を積み上げて閉塞した後、埋めてしまいます。現在、玄門部の調査が進行中で、これが明らかになれば、この石室の特徴が一層明確になるでしょう。



二子山３号墳横穴式石室模式図

横穴式石室実測図



Ｃ．二子山３号墳出土遺物リスト

石室内副葬品

(1)　土器類

須恵器：杯身12，杯蓋16,鹿4，短頸壺3，短頸壺蓋3，有蓋高杯1,無蓋高杯1,
台杯短頸壺3,台付短頸壺蓋3,広口壺1，台付有蓋壺1，台付有蓋壺蓋1
長胴壺1,小型壺1,提瓶2

土師器：壺6,

(2)　鉄製品

馬具：轡1,辻金具2，絞具2

武器：刀3,矛1,鉄鏃約20

農工具：鎌1,刀子5,斧1,

(3)　装身具

勾玉2,管玉5,ガラス小玉48点以上,耳環1,

墳頂部封土内

(1)　土器類

須恵器：杯蓋，杯身，甕破片多数,短頸壺2,器台1,

土師器：甕破片多数,

(2)　紡錘車（石製）

木棺直葬墓埋土上面

土師器3片

くびれ部墳丘斜面封土

須恵器2片

Ｄ．副葬品の出土状況

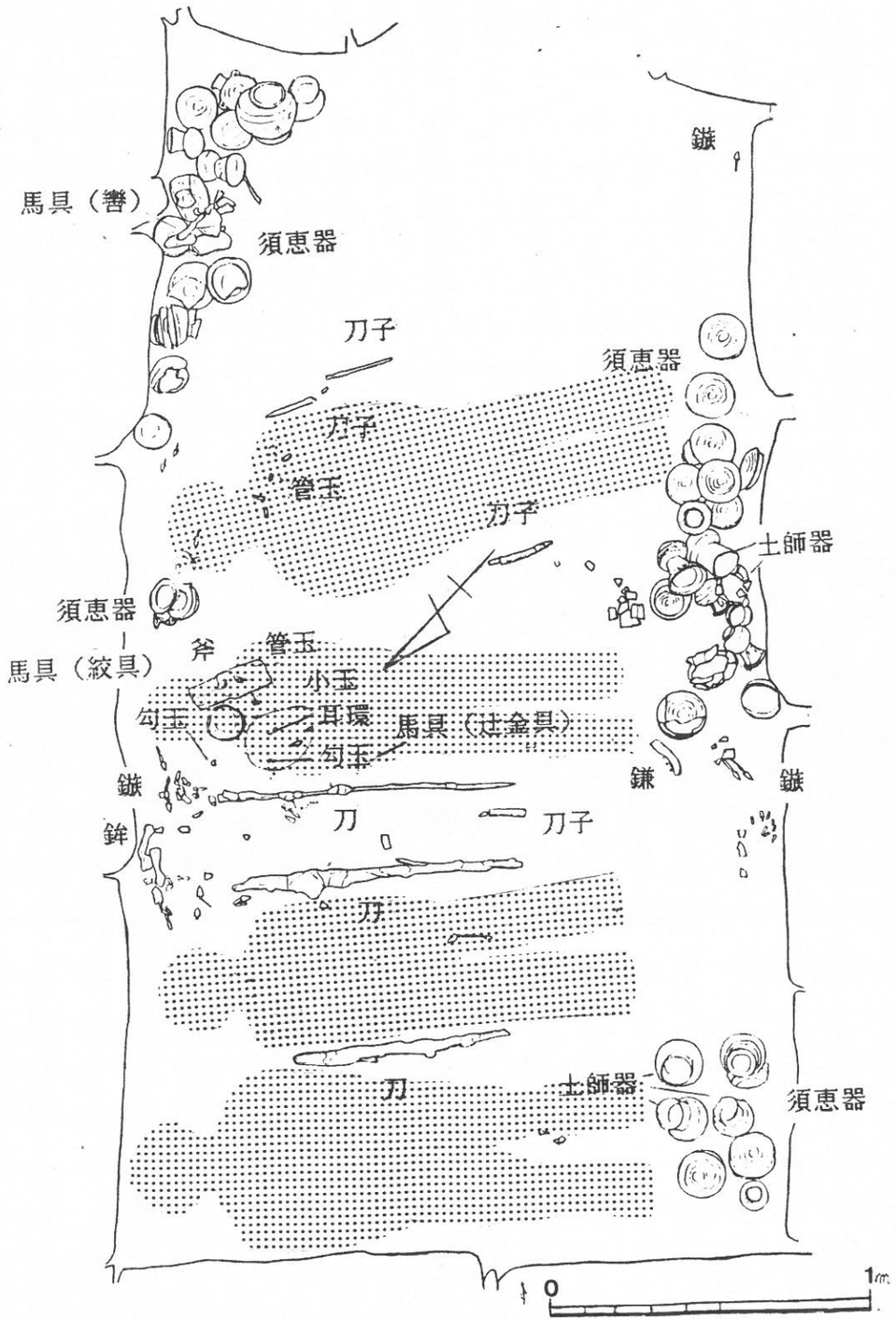
横穴式石室の中から出土した遺物は先にあげたとおりですが、これらはすべて死者を埋葬する際に石室の中に持ち込まれたもので、このような遺物を副葬品といいます。刀や馬具のように死者が生前愛用していた、あるいは大切にしていた品物、土器のように中に何かを入れてお供えしたもの、刀子のように死者を悪霊から守るためのおまじないの道具など様々な品物が納められますが、いずれも当時死後の世界への旅立ちに欠かせないと考えられていたものです。

横穴式石室の場合、同じ部屋に何人もの死者を納めるため、先に埋葬された人の副葬品は、棺を置く邪魔にならないようにと隅の方にかたづけられます。二子山３号墳では図に示したように３群の土器のまとまりがあり、ほかに刀や装身具、馬具がかなりまとまりをもって出土しています。これらのうち、確実に埋葬したときの位置を保っていると思われるのは、３本の刀と５点の刀子、玉類、耳環それに奥壁近くの１群の土器です。両側壁に沿って置かれている土器群は器種構成に差異があり、別の埋葬次の副葬品群である可能性が濃厚ですが、蓋と身が逆さまになっているものあって、まとめて移動されたと思われます。なお、右側壁沿いの一群のうち玄門よりの蓋杯２点は、この一群より区別して埋葬位置を保った須恵器とみることも可能なようです。

それではいったいこの石室に何人くらいの人が、どのように埋葬されたのでしょうか。それを知る手がかりは、もとの位置を保っていると思われる副葬品のありかたです。刀はふつう死者の体に沿って並行におかれます。また、玉類は首飾りないしは髪飾りとしてもちいられますから、その位置に頭があったことがわかります。これらのことから遺体の置かれ方を復元してみると図のようになり、少なくとも４人の人が奥から順に埋葬されたようです。このことは、副葬された土器の時期幅や、羨道埋土で確認された追葬の痕跡の数と矛盾しません。しかし、骨が残っていないために、正確な人数や性別はわかりません。

それぞれの死者にどの遺物が伴うかは、遺物の詳細な検討を待たねばなりませんが、奥壁沿いの一群の土器は整然とならんでおり、また、土器を安定よく据えるために底に当てがった小石がそのまま残っていたことから、もとの位置を保っていると思われます。これは最初の死者を埋葬するときに、その棺の横に並べたものでしょう。古墳の築造時期を決める重要な手がかりです。

また、鹿の飾りつき鹿は、ほかの土器がまとまって片付けられているのに対して、ひとつだけ離れておかれており、その扱いがほかの土器とは異なります。この古墳に葬られた人々にとって、特別な意味をもった土器だったのでしょう。このほかに特に興味深いのは、須恵器杯の中に魚の骨が入っていたことです。死者へのお供え物のわかった珍しい例です。



副葬品の出土状況

E．副葬品

a）須恵器

石室内から出土した３群の須恵器は、玄門寄りをＡ群、右側壁沿い中央部をＢ群、奥壁右隅をＣ群として、以下にその器種名を列挙します。

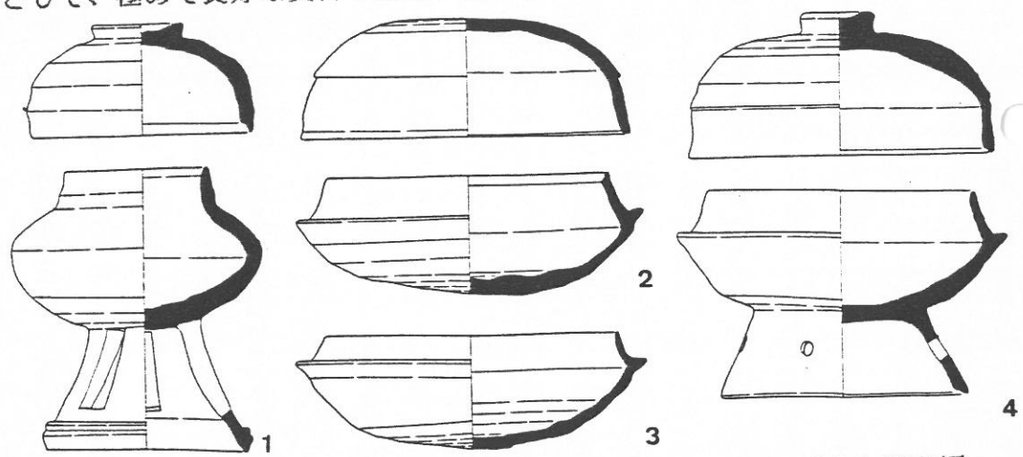
Ａ群：蓋杯２，杯蓋２，短頸壺（蓋付）２，短頸壺（蓋無）１，䣊２，提瓶２，有蓋高杯（蓋付）１，無蓋高杯１，脚付有蓋壺（蓋付）１，広口壺１，

Ｂ群：蓋杯７，杯身１，杯蓋２，台付短頸壺（蓋付）３，䣊１，短頸壺（蓋付）１，

Ｃ群：蓋杯２，杯蓋１，長胴壺１，小型壺１，

これらの出土土器は、大阪南部の陶邑古窯址群の編年に対応させると、ＭＴ15型式（Ⅱ型式１段階）～ＭＴ85型式（Ⅱ型式３段階）に当たるものと思われ、実年代としては、６世紀前半から中葉にかけて奥壁より玄門に向かって順に追葬されていったものと思われます。Ａ，Ｂ群については、追葬に伴い二次的な移動を受けている可能性があるため、どの土器がどの土器に伴うものか、必ずしも明確ではありません。ただあえて言うならば、Ｃ群土器やＡ群の多くは第１主体か第２主体のものと推測されます。Ｂ群の多くは第３主体のもの、南端の蓋杯２個と鹿飾付䣊は第４主体のものと考えられます。

なお、出土土器の中では、鹿の装飾を持つ䣊は、類例の少ないものとして注目されます。牝鹿の例としては、京都大学文学部博物館所蔵の 奈良県御所市出土例が比較できる資料として挙げられるでしょう。また、Ｃ群土器に含まれる長胴で平底の壺も特殊なものであります。若狭における、後期古墳出土の須恵器として、極めて良好な資料を呈示したと言えます。



(1)脚付短頸壺　(2)蓋杯　(3)杯身　(4)有蓋高杯

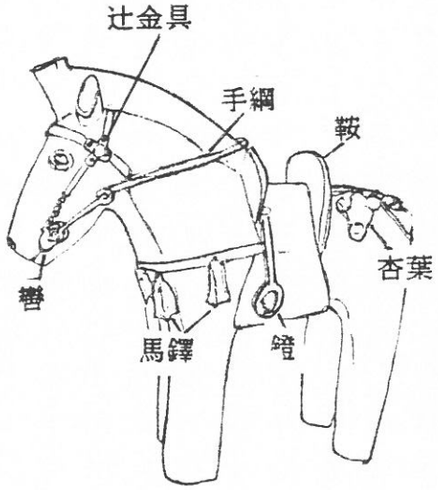
石室内出土須恵器実測図

須恵器

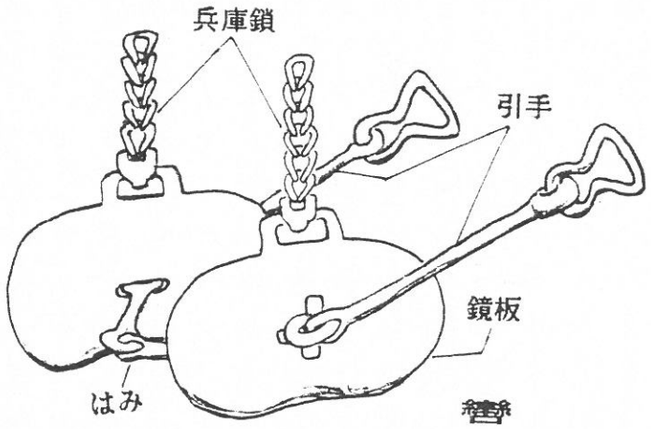
b）馬具

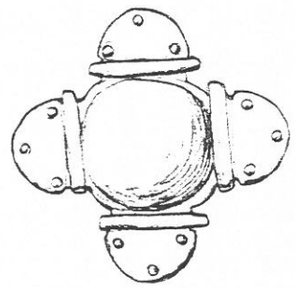
馬具とは乗馬の際に馬を操るための道具や、馬を飾りたてるための道具などの総称です。馬具が古墳に副葬品として納められたのは５世紀以降のことですが、６世紀から７世紀にかけて多くみられます。ただし、木や布、革の部分が腐って金属製の部分をとどめるに過ぎません。二子山３号墳からは、馬の口にはめ、手綱を取り付けるための轡１点とベルトの交点に取り付ける辻金具が２点出土しました。なかでも辻金具の１点は、台付壺の中から見つかり、追葬の際に片付けられたものと考えられます。杏葉などの馬を飾る類の馬具は出土しませんでした。

轡は、長径約12cmの楕円形で、下端を弧状にえぐり込む鏡板を持ち、引手とはみが鏡板の外側で連結するものです。鉄製の楕円形鏡板が付く轡は、５世紀後半から６世紀前半にかけて使用され、全国で30例ほどが知られています。若狭では、三方町きよしの２号墳から出土しています。



馬具の名称

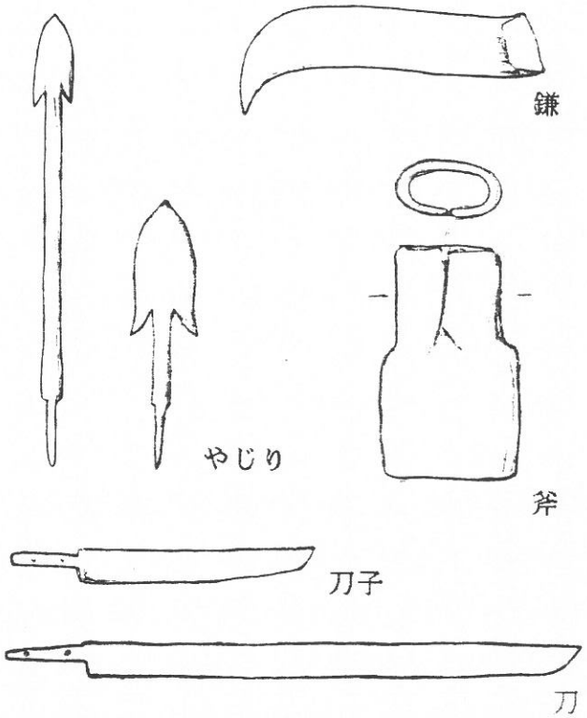




辻金具

c）鉄製品

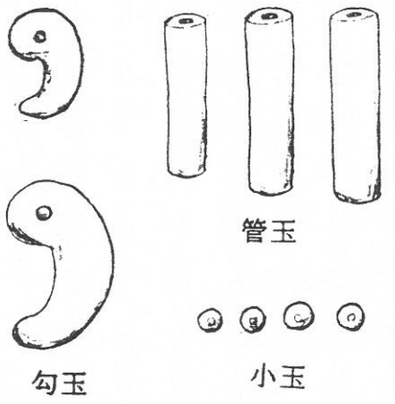
馬具・武器・農工具といった鉄製品が出土しています。保存状態はあまりよくありません。武器には刀３本、鉾１本、やじり約20本があります。農工具は鎌、斧各１本と刀子５本が出土しています。刀３本は被葬者３人に各１本ずつ添えられたと思われる出土状況でした。刀子はかなり大きいもので、悪霊を払うなどの呪術的な役目をもっていたのかも知れません。



d）装身具

この古墳からは勾玉（まがたま）２点、管玉（くだたま）５点、ガラス小玉45点、銅製の耳環１点が出土しました。勾玉はメノウやヒスイから作られており、管玉はすべて碧玉（緑色の石）製です。これらはすべて、玄室から羨道に向かって左側の側壁沿いの中央部で２群にまとまって出土しています。耳環はもちろん耳飾りですし、玉類は首飾りと考えられますので、２人の被葬者の頭部がこの付近にあったと推定できます。

古墳時代の人々は性別に関係なくこのような様々な装身具を身につけていましたが、そのなかでも玉類はよく見られ、身体を飾るために広く用いられました。

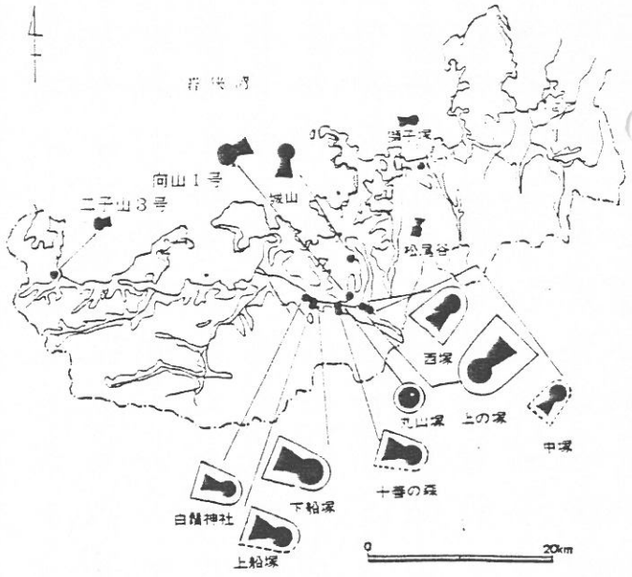


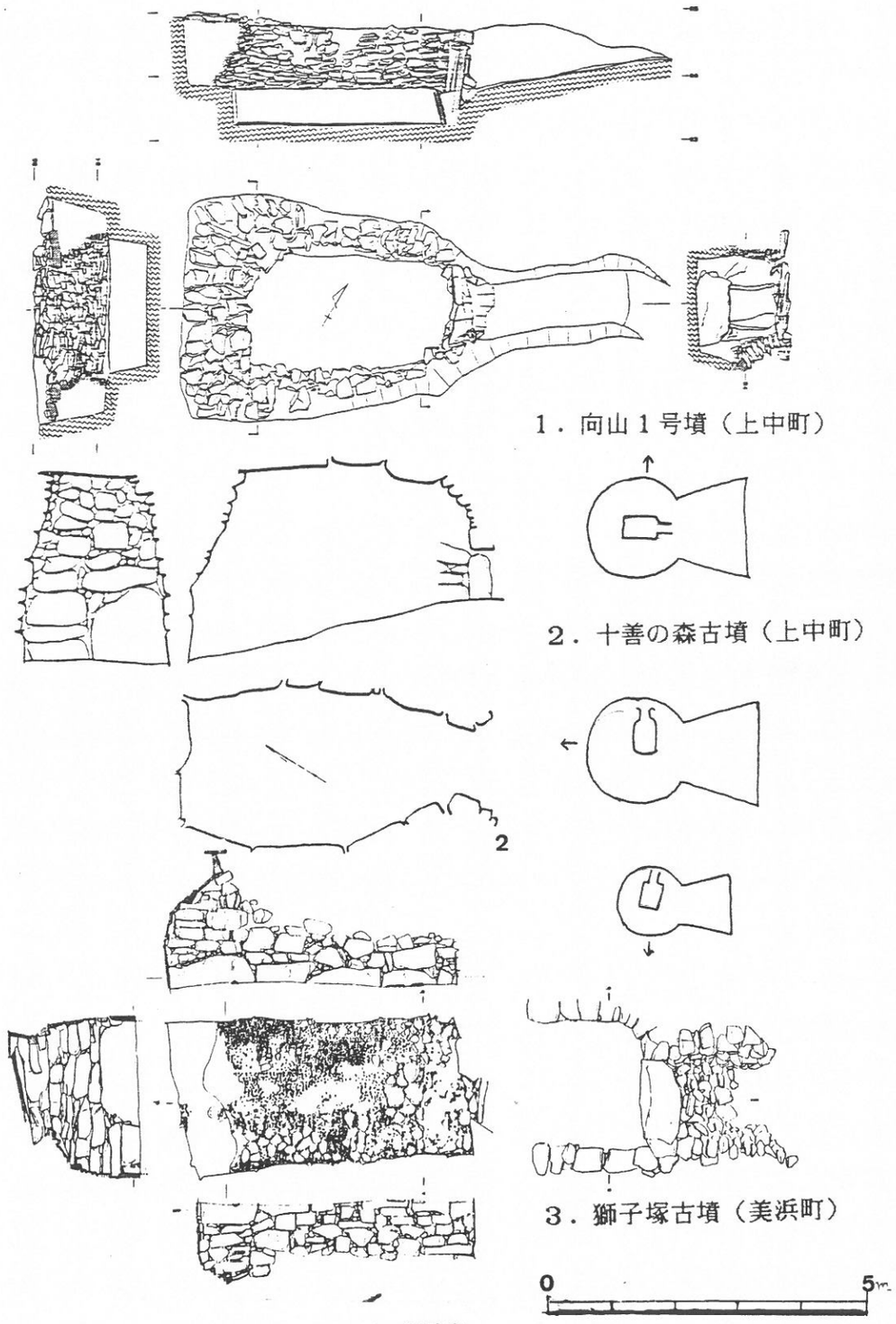
F．まとめ

２ヶ年にわたる二子山３号墳の調査の結果、古墳の形や埋葬施設、副葬品等が明かとなりました。これらは大飯郡内唯一の前方後円墳の基礎資料として重要であるばかりでなく、６世紀前半代の若狭の小首長の実体を知る上で、貴重なデータを提供しました。古墳は全長26mと小規模で、副葬品も上中町の首長墓と比較すると決して豊かとは言えません。しかし、全国的にも類例の少ない鹿形装飾付踏を初めとする多くの須恵器、武器、馬具を保有した二子山３号墳の被葬者は、在地に根付いた首長として上中に基盤を置く膳臣勢力に対して一定程度の独自性を発揮していたと思われます。５世紀に前方後円墳の見られなかった地域である高浜町に、６世紀に至って忽然と出現するこの前方後円墳の意味は、この観点から考えねばなりません。

二子山３号墳が築かれた頃と相前後して、今まで前方後円墳の見られなかった美浜町にも獅子塚古墳が現れます。この古墳と二子山３号墳は、石室構造が類似し、その出現には二子山３号墳と同様の契機が考えられます。若狭の東西両地域で見られるこの現象は、上中町の古墳を営造した膳臣の首長層に何等かの動揺が生じ、今まで目だった古墳を築けなかったこれらの中小首長が台頭して、前方後円墳を築けるような状況になったという歴史的背景を推測させます。上中町脇袋古墳群が西塚古墳で途切れ、天徳寺に十善の森古墳が出現することもその傍証として挙げられます。このような旧来の首長系譜の変容は、全国的にみられる現象ですが、若狭の場合は、土器製塩と海上交通の掌握をめぐっての確執から、新興首長が台頭し易い条件が芽生えていたことが要因でしょう。

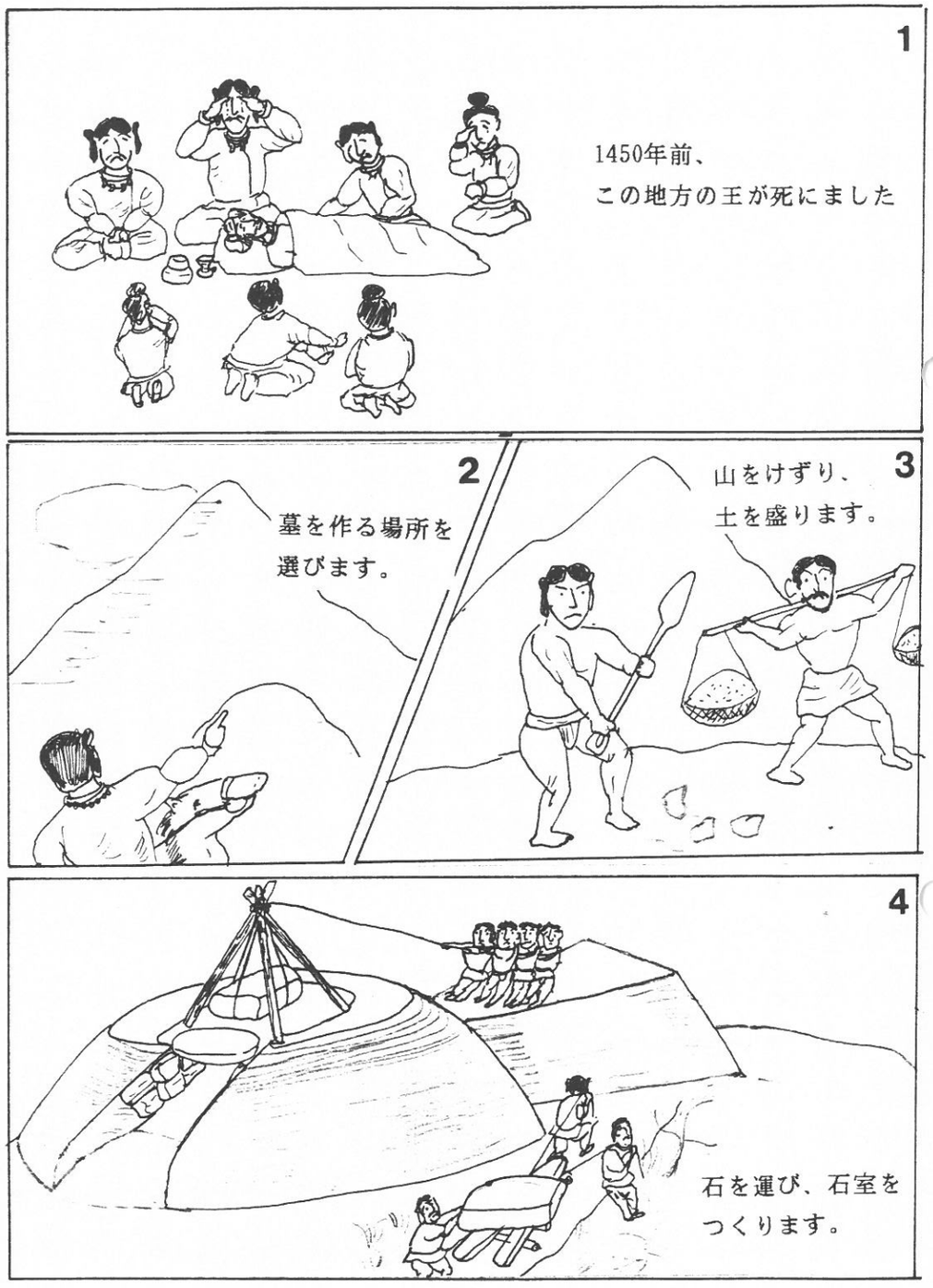
さらに、６世紀前半以前の若狭の横穴式石室は、形態的に九州の横穴式石室と共通する部分が多く、二子山３号墳も例外ではありません。これが、６世紀中ごろの丸山塚古墳になると、畿内の横穴式石室と類似した横穴式石室が導入されます。若狭が、次第に中央集権的な体制下へ、編入されて行く過程がそこにみられます。６世紀の若狭の古墳時代は、正に激動の時代で





若狭の初期横穴式石室

二子山３号墳の歴史



5
棺をおさめます。
6
石で入口をふさぎます。
7
追葬のときは、前の副葬品をかたづけます。
8
古墳の上で、おまつりをします。
9
長い年月の間に墓であることが
忘れられてしまいます。
10
そしていま、私たちが発掘
しています
SAPPORO